海軍の月

庄司和晃

今でも予科練ばかりです。海軍狂のところまでは行っていませんが、とにかく海軍が好きです。毎年の七、八月は、自分勝手に「海軍の月」と呼んでいます。この期間に海軍ものの本やビデオに、集中的に浸り切っています。折をみては予科練記念館や回天記念館を訪ねたり、呉や佐世保の海軍基地に参ったりもして来ました。

そして八月十五日には、かつて訓練を受けて終戦を迎えた「伏竜特攻」の地、三浦半島の久里浜の海辺に立っています。正午に天を見上げ、そこで私の「海軍の月」の行事は、すべて終了です。

小松空から「伏竜」の特攻隊へ行ったのは、昭和二十年の七月でした。志願して決まった者は百人位いたでしょうか。わが分隊からは七人でした。見送りはぎょうぎょうしいもので、尾頭つきの祝いの席、島居少佐の訓示、そして帽ふれのもと、隊門を出て久里浜に向いました。伏竜特攻とは、いわば水際の作戦であり、敵の上陸用舟艇に海底から浮き上がりつつ、爆薬とともに体当たりするという日本海軍最後の案出に依る特攻方法の作戦でした。

伝馬船に乗りこみ、潜水服をきて五米ほどの海底に潜る訓練を続け、ようやくその潜りにも慣れ、自信が出てきた頃終戦という事になり、職斗実施の前に終ったわけです。一ヶ月にも満たない期間でした。

玉音放送をきいてから解隊となり、私たちは舞鶴鎮守府に連れて行かれ、そこの倉庫で米など貰いそれから復員しました。復員の時の訓示で隊長さんは、「やがて米英撃滅に立ち上がる時機が来る。十年目にわしが号令をかけるから、その際は必ず指定のところに集合する様に」と命令をふくんだ話しがあり、それを耳にして故郷に帰った訳です。しかし、十年後もそういう指令もないまま過ぎてしまい、敗戦を実感するばかりでした。

この特攻隊に志願した時、たしか黒田兵曹に呼ばれ「お前は特攻隊というものがどんなものなのか知っているのか。必ず死ぬんだぞ。いいのか。お前は先頃足の怪我で海軍病院に入院した身だというではないか。大丈夫なのか。」と強く言われました。乗りかかった舟でもあったので、姿勢を正して志望の念を返答しました。その結果の特攻隊行きでした。満十七歳の夏の事です。

私が入院したのは、山中海軍病院で、山中温泉の町はづれの高台にありました。春先、柔道の稽古中に左膝にひびが入って歩行困難になり、早速入院という事になったのです。同じ頃入院した人に第二班の渡辺正雄君がいます。私よりずっと酷い怪我で、ベットで苦しんでいたのを覚えています。

私はギプスをかけられ松葉杖にも慣れた頃、当時接収されていた温泉ホテルの河鹿荘に移されました。そこには南方で負傷したり、病気になった人達が二百人程養生していました。

思えば、たった一年の予科練生活だったのに、美保空、小松空、海軍病院、伏竜特攻隊という様に、得がたい体験でした。ことのほか印象も強く、生活的にも思想的にも一生を貫くものとなりました。中でも、出船の精神とか、五分前の精神とか、今なお自分自身を律している有様です。

『七つ釦、青春譜』十五期海軍甲種飛行予科練習生
美保空八十六分隊・小松空三十分隊 戦闘録 2005年刊 P72～73